連載◇リレーエッセイ　私が出会った大阪文学学校③

迷いこんだ幻の家

真銅　孝

たしか体験入学には二回、行ったと思っていた。

しかし、いくら考えても一回目の記憶がはっきりしない。なぜだろうと首をひねっていたら、最近ようやく思いだした。谷町六丁目の駅を降りたあと、初めての土地で道に迷ったのだ。散々歩きまわった挙げ句、疲れ果てて帰ったのだった。

そして二回目の、ほんとうに行った体験入学では、高田文月Tが担当していた。窓越しに射す春の西日が教室中を幻想的に満たしていて、現実から隔絶されたような不思議な安らぎがあった。テキストは詩だったが、ぼくは小説クラスが希望だったはずで、きっと、よくわからずに行ったのだろう。見当はずれな感想をいったにちがいないが、それでも受け止めてもらえる場の雰囲気にほっとしたというか、ちょっと得意にすらなっていたかもしれない。

まだ二十歳だった。高校を出て、将来の道筋もたたず、ひたすらじぶんの自意識を持て余していた。太宰治が好きな程度には文学青年だったから、新聞で広告を見つけたときに興味を持ったのだろう。実家の玄関脇にあった黒電話から、緊張しながらダイヤルした。電話に出たのは紅さんだったか。

入学式の前日に申込書と学費を持っていった。小原さんが対応してくれたが、そのときぼくは「入学式には何を着ていけばいいですか」と質問したぐらいに平凡な青年だった。

入学したのは、一九九四年の四月。当時、夜間部の本科小説クラスは金曜日に二クラスあった。ぼくが入ったのは牧川史郎Tのクラスだった。もう一クラスは尼子一昭Tが受け持っていた。組会が終わると、となりのビル一階にあったお好み焼き屋ＤＡＮ（今は喫茶店になっている）にいつも押しかけていた。せまい店内に二クラスが合流することになるので活気があった。世代もさまざまで、年配の人もけっこういた。「若いツバメ」という言葉もそのとき覚えた。

その場がおひらきになると、同じクラスの人にタクシーでよく堺のスナックへ連れて行ってもらった。朝まで飲んで歌った。休みの日には、グループで車二台に分乗して六甲山へドライブに行ったこともあった。

牧川Tは小柄な人だった。高知育ちで「いごっそう」というのか、作家としての気概のようなものを持っていた。いわゆる文士タイプだった。飲み会ではときどき土佐弁を使ってみんなを笑わせていた。細身ながら腕まくりの似合う、所作のきれいな人だった。

牧川Tに一度、新世界へ連れて行ってもらったことがある。二人きりだった。そのとき、ぼくは初めてゲイバーというところに足を踏み入れたのだった。牧川Tがカウンター越しにママと楽しそうに話しているのをただ横目に見ているだけだった。店を出るとその足で、二人は近くのさびれたビジネスホテルに入った。着替えてさあ寝るという段になって、おもむろに牧川Tが「真銅くん！」とベッドの上で抱きついてきた。一拍あったあと、苦笑しながらそそくさと離れていく牧川Tの細い背中が忘れられない。

ともあれ文校に入って最初の一年というのは、きっとだれもがそうだろうが、ほんとうに楽しい。掛け替えのないほど充実した一年だったし、その後の人生をも変えた。いや、ぼくの場合、人生はある意味、ここから始まった。

入学した当初、ぼくは自己紹介のたびに「作家になります」と宣言していたが、これは今では恥ずかしい思い出になってしまった。一年、二年と「文校」を経験していくにつれ、そんな思いはしだいしだいに消えていった。じぶんの実力不足は措くとして、賞狙いのために小説を書くことはむなしいと思うようになった。しかし、それでも書くということ、書き続けることの意味を、文校で出会った人たちから教わった。

ぼくは牧川クラスに一年、専科にあがって大垣さなぇTのクラスで一年、そのあと半年だけ葉山郁生Tに研究科でお世話になった。学生委員会にも入ったが、名ばかりの副委員長をしただけで、あとは新聞部で、のらりくらりとしていた。

入学した翌年の一月、ぼくは事務局に入れてもらった。阪神淡路大震災の二日後だった。右も左もわからず、がむしゃらだった。

当時、入学開講式では長谷川龍生校長が特別講義をおこなっていた。目を見開いて、大きな身振り手振りで、新入生たちの座るイス席に覆いかぶさらんばかりだった。また、チューターのあいさつでは、たぶん木辺Tだったと思うが、文校は大人の幼稚園、あるいは動物園だと愉快そうに話していた。その木辺Tも変人で通っていた。チューターのなかでも木辺Tは、ぼくにとってトップ・スターだった。小説はすべて読んだし、「未決の風穴をあける」というフレーズにしびれた。

かつて事務局長もやった高村三郎さんは、名物チューターだった。「ばかたれ」が口癖だった。こわいのかと思っていたが、合同クラスで合評会があったときには、「樹林」在特号に載ったぼくの作品を認めてくれた。ぼくが事務局に入ってからも、床のモップ掛けをしている姿を見て、通りがかりに「力持ち！」といってくれたのは、うれしかった。

とにかく文校は、日常的な社会生活を営む場とは別世界で、集まってくる人も、のびのびと個性的だった。交流会などの場も、ここぞとばかり、みんな元気が止まらなかった。

ふりかえれば、ぼくが迷いこんだ文校は、人との出会いの場だった。遠野物語では、訪れた者に富をもたらす山中の幻の家を「迷い家（マヨイガ）」というが、迷い迷ってたどりついた文校は、出会いという富をもたらす場というか、幻のようでもあり、今もその場にたずさわっているじぶんは、さて、いつ現実に戻るのだろう。